



ともに 生きる

やまゆり園事件 から半年

■働く場県内に広がる

「ともしびショップ」

障害者が働く喫茶やパン店は県内各地にある。かつては親の会などが市民と接する場として始めることが多く、近年は法人が運営する店が増えてきたという。はやりのコーヒーショップとはひと味違う、ゆったりとした接客が魅力だ。

海老名市役所1階にある「ともしびショップ ぱれっと」。昼が近づく

と次々に客が訪れ、12あるテーブルが満席になった。

「ナストマトのお客様って、大きい声で言ってね」。調理場のスタッフが天野多恵さん(32)に声をかけ、パスタをお盆に載せた。天野さんはそろりそろりと丁寧に運んでいく。代表の藤田精子さん(63)は「ランチタイムは戦場です」。

運営するのは、親や支援者で作る海老名市手をつなぐ育成会。藤田さんはその会長で、自身も障害者の親だ。障害者が市民と接し働く場として、2000年春に開店。4人の知的障害者が働いている。

「仕事は机を拭いたりスープをよそったり。すごく楽しい」と働き始めたばかりの堤勇太さん(20)。福井美知子さん(48)は「ノロウイルスがあるので机を拭くのも気をつけないと」と話す。「貯金して洋服や本を買うのが楽しみ」という篠田誠さん(41)は、働いて15年のベテランだ。

チェーン店のようなマニュアルに沿った接客はできない。それゆえの丁寧でゆったりとした雰囲気、心地よいと感じる客に支持されているという。

藤田さんは津久井やまゆり園の事件後、「障害者はかわいそうだから優しくしよう」という風潮を感じるという。「本人は自分のことを不幸だなんて思っていない。障害者にも生きがいがあるし、その存在に助けられる人もいる」。店で接することで、そんなことも感じ取って欲しいという。



「ともしびショップ」は1989年に県庁内に1号店が生まれた。公共施設を中心に県内41カ所に広がり、県社会福祉協議会のウェブサイトに一覧がある。

横浜市が支援する「ふれあいショップ」も市内に9店舗。社会福祉法人やNPO法人が独自に運営する店も県内各地にある。

横浜市旭区で障害者が働く喫茶など12店は昨年12月から、「くらむぼんの地図 愉快的カフェスイーツ店マップ」を配っている。スタンプラリー形式で、持参すると特典も。問い合わせは喫茶カプカプ(045・953・6666)。

■障害者 県内40万5643人 昨年度末 人口の4.4%

県の統計によると、県内の障害者の数は昨年度末時点で40万5643人。人口の4.4%がなんらかの障害を抱えている計算だ。

身体障害者がもっとも多く27万835人。精神障害者は6万9814人。知的障害者6万4994人と続く。11年度末は全体で約35万6千人で、年々増加している。社会の高齢化が進み、加齢のため障害を負う人が増えていることが一因という。

神奈川は全国的に見ると、入所施設で暮らす障害者が極めて少ない地域だ。14年3月時点で施設に入所している人の数は5053人。人口10万人あたりの入所者数は全国平均の104.2人に対し、神奈川県は56.5で全国最少という。県障害福祉課は「早い時期から地域で暮らしていく取り組みについて、障害者や家族、行政が協力して努力を積み重ねてきた結果が表れている」としている。

グループホームは増加が続いている。06年度に3528人だった利用者数は、15年度には7294人まで増えた。